

---

# 幻艦記 欧州編

山口多聞

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

幻艦記 欧州編

### 【Nコード】

N0128B

### 【作者名】

山口多聞

### 【あらすじ】

昭和14年、独逸キール軍港に4隻の軍艦が入港した。物語はここから始まる。幻艦記大東亜編の姉妹シリーズです。

## プロローグ（前書き）

龍嬢という表記になっていますが、変換がないためこれを代用いたします。

## ブローグ

昭和14年（西暦1939年）5月、間もなく第二次大戦が始まるうとしていたその日、独逸海軍の拠点であるキール軍港に4隻の見慣れぬ艦艇が入港した。

その4隻に掲げられていたのは、赤地に鍵十字があしらわれたドイツ第三帝国海軍旗ではなく、まばゆい登る朝日を模した旗。極東の国、日本の海軍の公式旗である旭日旗であった。そしてそれを掲げている艦艇で一番大きな船は、平らな甲板を持っていた。そう、独逸にはまだ無い航空母艦であった。

この日キールに入港したのは、大日本帝国海軍の軽空母「龍嬢」、そして帝国海軍の誇る特型駆逐艦2隻に給油艦1であった。

たった4隻のささやかな艦隊の入港。しかしながら、この時から歴史は大きく変わり始める。

## キール1939

キールに入港した龍嬢には、陸軍の97式戦闘機と、海軍の96式戦闘機が積まれていた。これらの機体は組み立ての後龍嬢から発艦し、近郊の飛行場に着陸した。この2機種の輸送は独逸への進呈と、現地で独逸の戦闘機との模擬空戦を行う事が目的であった。ちなみに、この2機種はその後Bf109との空戦で、その格闘性能をもつてBf109を翻弄し、独逸側の技術者を大いに驚かせた。また、96式戦闘機の1200kmという航続距離も驚かせた。ちなみに、日中戦争では、それでも不足であったが。しかし、このころBf109の航続距離は1000kmにも届いていないし、またヨーロッパの戦闘機で1000km飛べる機体は稀であったから、最もな話であった。

一方、龍嬢と護衛駆逐艦にはその他の物資が積まれていた。酸素魚雷、落下増槽の設計図等であった。これらの供与という大判振る舞いには、当初反対の声が大きかったが、「独逸を見返すにはこれ以外なし。」という意見が押し切った。この時代、独逸ではヒトラーの我が闘争の中の、日本人は2等民族という意見が蔓延していた。それに冷や水を指す。その意味も大きかった。

キール入港3日後、沖合いで龍嬢は総統ヨット座乗のヒトラーの謁見を受けた。彼が遥々キールにやってきたのは航空機の離着艦を見るためである。

日本側の96艦戦、99艦爆、97艦攻は見事な離着艦を披露した。加えて、99艦爆の筏を標的にしての急降下爆撃や、97艦攻の総統ヨットを模擬目標にしての高度5m模擬雷撃等は、ヒトラー総統に「余は日本人への考えを改めねばならぬかもしれない」と言

わしめた。これは後に、ヒトラー総統が続我が闘争の中で語っている。

一方、この日龍嬢ではドイツ側が建造中のグラフ・ツエッペリンように開発された機体の離着艦も行われた。この時の機体は戦闘機がB f 1 0 9とH e 1 1 2、H e 1 0 0で、爆撃機がB f 8 7であったが、B f 1 0 9は大見事に着艦に失敗した。そのため、ヒトラー総統はとなりにいた開発者のメッサーシュミット博士に「これはどういうことかな？」とにらめつけたという。また、その他の機体も急ごしらえであったため、艦上機としては適正を欠いていた。

とにかく、この時の経験から、のちに独逸では艦載用戦闘機の開発を行う事となる。

## キール1939（後書き）

実際、陸上機改良であつたBf109は艦載機に向かなかつたとされていきます。

## キールでの歴史転換

離着艦テストの翌日、日本側の技術者が建造中のグラーフ・ツェッペリンを視察した。しかし、ツェッペリンに対する日本の技術者の感想は芳しいものではなかった。時代遅れの対艦用の砲、大きさに比して少ない搭載機と対空砲等、言いたい放題であった。しかし、これは仕方がなかった。なにせドイツには空母建造の経験が全くなかったのだから。それでも、いきなり大型空母の建造に着手するなんて、非常識と思われた。第一、艦載機のパイロットの養成さえなされていなかったのだ。そこで、日本側の技術官は、「訓練用に商船改造の軽空母を建造した方がいいですよ。」とアドバイスした。これを受けたのかはわからないが、後日ドイツ海軍は商船改造空母のザクセン級を2隻建造している。

そして2ヶ月後、龍嬢は任務を終え、日本に帰還した。この時龍嬢は、購入したHe100やHe112、分解された四発爆撃機であるFw200等、日本がのどから手が出るほど欲がっていた武器や軍需品を搭載していた。

この時の交流は、日独双方に多大な利益をもたらした。日本側は優秀な戦闘機と爆撃機を手に入れ、加えて最新式の工業機器も購入していた。ドイツ側は、後にバトルオブブリテンで大いに活用する落下増槽や、Uボートに搭載され活躍する酸素魚雷。それに空母の設計図（赤城級、大鷹級）や艦載機の実物も手に入れた。これが後に、欧州の歴史を大きく変えて行く事になる。そして、1939年9月。ドイツ並びにソ連がポーランドに侵攻した。第二次世界大戦の始まりである。その8ヶ月後、ドイツ空母ザクセンは竣工した。





## ライン演習作戦発動

1941年 独逸

1939年に始まった第二次世界大戦は当初ドイツ有利で進んだ。しかし、あつと言う間に欧州を席卷したドイツであつたが、1940年のバトルオブブリテンでの敗戦以降、その進撃が鈍っていた。もっとも、対峙する英国も苦しかった。バトルオブブリテンで勝利こそしたが、その代償は大きく、実に稼働戦闘機の8割を失う大打撃を負っていた。パイロットの損失も6割強に上り、RAF（大英帝国空軍）は深刻な機体不足に陥った。特に戦闘機の損失は痛く、植民地軍の物まで引き抜いてようやくしのぎきつたのだった。それによって航空戦力の不足した地中海方面で苦戦を強いられることとなった。そして、隙をついたイタリアによって、ギリシャ等がおちてしまった。まさに地中海方面で英国は八方塞がりであつた。

一方のドイツは、ヒトラー総統が偏食と激務で倒れたため、臨時にレーダー海軍元帥が総統に就任した。レーダー元帥はまず、ユダヤ人絶滅計画の一時凍結を命令した。そのかわりに、彼らを強制労働につかせた。彼に言わせれば、戦時下にそのような事は非効率であり、ドイツにとって汚名となると思つたのだろう。これが彼の評判を二分することになるが。

一方、彼が手塩にかけて育て上げた海軍の状況は芳しいものではなかった。開戦早々装甲艦のシュペーを失い、またノルウエー攻略戦でも大きな損害を受けた。もしこの時、酸素魚雷で英戦艦ウオースパイトを中破させ、駆逐艦を5隻撃沈できなかつたら、ヒトラーは海軍に不信感を持ったかもしれない。

その独逸海軍は、着々と再建を進めつつあった。すでにビスマルク級の後継のフリードリヒ・デア・グロッセ級2隻が起工しているし、空母グラーフ・ツェッペリンも竣工間近であった。

地中海では、フランスからの鹵獲艦艇を中心に、地中海艦隊が編成された。戦艦モルトケ級（元ダンケルク級）2隻に重巡1、駆逐艦8から成るそれなりに強力な艦隊であった。ちなみに、これ以外にも拿捕艦艇はあったが、乗員不足で動かせなかった。

そして、1941年6月、ライン演習作戦が発動された。

## ライン演習作戦発動（後書き）

ノルエー攻略戦においてウォースパイトが中破したという事実はありません。念のため。

## ライン演習作戦

ライン演習作戦は通商破壊と迎撃してくる英国艦隊を各個撃破する一石二鳥の作戦であった。

出撃した戦艦ビスマルクと重巡プリンツ・オイゲンを中心とする部隊は5月21日、英戦艦フッドとプリンス・オブ・ウェールズと会敵し、前者を撃沈し、後者を大破させた。しかし、これに対し英海軍は激怒した。フッドは国民に親しまれ、英国海軍の象徴だったからだ。そして全戦力を結集してビスマルクを追跡し始めた。

一方、暗号電文の増加からそれを察知した独逸艦隊司令官リッツェンス少将は、伏兵に対し、援護を要請した。そして案の定、英海軍のソードフィッシュ雷撃機がやって来た。当初英軍攻撃隊指揮官は、直援機のないビスマルクへの攻撃は楽勝だと思っていた。しかし、彼らが見たのはビスマルク上空に数機の戦闘機が飛んでいる姿だった。そして10分で英軍攻撃隊は全滅した。これこそ、ドイツ空母ザクセンとナツソーの初陣であった。両艦は商船シャルンホルスト級を改造した船で、搭載機28機、最高速力25ノットの性能を有していた。

両艦はビスマルクの東200kmの位置におり、必要に応じて航空戦力の支援をする事となっていた。この時上空支援したのは、独逸海軍艦上戦闘機He122であった。

独逸空母出撃の方に最初は驚いた英海軍であったが、しかしこの時期空母はまだ補助兵器という認識しかなく、大した脅威と認めなかった。しかし、これが命取りとなった。

翌日、ビスマルクを追撃していた戦艦ネルソンがUボートの魚雷を2本喰らった。無論戦艦だから致命傷とはなかったが、速力が落ちた。そこへ、独逸の雷撃機、ザクセンの搭載機が襲い掛かった。この機体は独逸海軍が日本の97艦攻を模倣した機体だったため、

航続距離が長く、ギリギリ攻撃できたのであった。結局、ネルソンはさらに5本の魚雷を喰らい沈没した。

航空機のみで戦艦を撃沈する事は出来なかったが、この作戦で独逸海軍は見事2流海軍の汚名を返上したのであった。

ライン演習作戦は大成功のうちに終わった。

He 122    ハイнкエル博士が日本の零戦を元にHe 112を大改修した機体。

## ライン演習作戦（後書き）

ザクセンとナツソウの艦名は徳間書店の紺碧の艦隊から出しました。

## ソ連参戦

ライン演習作戦後、欧州において目立った海戦は起きなかった。しかし、そんな中で1941年10月、欧州全土に衝撃が走った。

親ソ派であった米大統領ルーズベルトがソ連海軍に艦艇の売却を行ったのだ。ニューメキシコ級戦艦3、ペンサコラ級重巡2、オマハ級軽巡4、平甲板型駆逐艦16であった。これらの艦艇はソ連側の乗員が約3ヶ月のアメリカでの訓練の後、次々とクロンシュタット<sup>レーニングラード</sup>軍港へ回航された。

この時点でドイツはソ連と不可信条約を結んでいたもので、これらの回航を指を加えて見ているしかなかった。しかし、ソ連が東欧開放をお題目にして独逸に宣戦布告するのは時間の問題と思われるていた。

そして、1942年6月。予想通りソ連軍はポーランド分割ラインを突破。ドイツ占領地に雪崩こんだ。しかし、あらかじめ侵攻を察知していたドイツ軍は猛反撃。特に、航空戦力の優勢を武器に、ソ連軍を叩いた。また、海軍も出撃し沿岸部進行中のソ連軍を艦砲射撃した。後の戦史家はここでソ連艦隊が出てきたいたらと良く言うが、結局彼らは出てこなかった。そして、8月にはドイツ軍は巻き返し、逆にソ連軍をポーランド国境に追いやった。そしてドイツとソ連はそこで膠着状態に陥った。

まだ本格的に英米からのレンドリースを受けていなかったソ連、そしてアフリカ方面へ戦線を広げていたドイツ両軍に、それ以上戦う力は残っていなかったのだ。

ソ連艦隊が本格的な活動を開始するのはこの半年後となる。ちなみに、ソ連海軍はこの頃大粛清の影響がたたってまともな人材が払底していたから、出撃できなかったのもうなずける。ただ、増強す



る独逸海軍の影響を受け、こちらも海軍の増強にかかっていたのも事実だ。米国からの艦艇の購入をはじめ、9000t級の軽空母レニンや、巡洋戦艦クロンシュタット級の建造を開始していた。

戦艦ニューメキシコ、アルハンゲリスクに改名

戦艦アイダホ ノヴォーロシスクへ改名

戦艦ミシシッピ ウラジオストツクへ改名

### ソ連参戦（後書き）

実際ソ連に渡されたのは英国のR級戦艦でした。それも一隻で供与ではなく貸与でした。

今回の話では学研の旭日旗往く、実業日本之社の北冥の海戦を参考にしています。

## 地中海制圧

一方、アフリカ戦線では英軍の空軍不足の隙についてロンメル將軍の装甲師団が破竹の進撃を行っていた。英軍は独地中海艦隊の攻撃でマルタ島が陥落しエジプトへの補給路が完全に遮断されてしまっていた。

そして1941年12月、ついに独逸アフリカ軍団はエルアラメンを突破、翌月にはスエズ運河を確保した。結果、地中海と紅海の制海権は完全に枢軸軍に渡ってしまった。

最終的に、3月にエジプトの英軍は降伏した。そしてエジプトには親枢軸政権が誕生し、ドイツは中東への足掛かりを掴んだ。ちなみに、イタリアのムッソリーニはエジプトの領有を主張したが、リーダー総統代理はそれを許さなかった。現地住民の反乱を恐れたのだ。それに対し不満のムッソリーニだったが、ドイツ側は資源の優先供給と捕獲した英軍艦艇の譲渡でなだめた。というよりも、イタリア側は負け続けで弱みを握られていたため、それで我慢せざるえなかったのだ。

一方、スエズ運河の通行が可能になったため、日本との連絡が容易になった。6月には英東洋艦隊が日本機動部隊によるセイロン島への攻撃で壊滅したためもある。

日本がセイロン島攻略を開始したのは同月のことであった。そして英軍はそれを予想できなかったため、セイロン島はあっさり陥落し、インド洋は完全に枢軸軍の物となった。しかし、最終的に独海軍がインド洋方面に進出することはなかった。なぜならそのころには大西洋・バルト海での連合軍の活動が活発となったからだ。

ライン演習作戦で戦艦2隻を失った英海軍は、さらに日本の開戦で東洋に派遣した4隻の戦艦と3隻の空母、さらに地中海では独地

中海艦隊とイタリア海軍によって3隻の戦艦と1隻の空母を失った。しかし、英海軍はそれによって動かなくなったが、今度はソ連軍が動きを見せた。独逸側の数度に渡る偵察により、レーニングラード軍港のソ連艦隊や東部戦線の陸空軍に動きが見られたからだ。そして、1943年2月、ソ連軍は再び欧州になだれ込んだ。そして、それとともにソ連バルチック艦隊は出撃した。

## 地中海制圧（後書き）

この世界では、ドイツでヒトラーが倒れたため、ナチス党の力が弱まっています。それにより、独海軍は忠実より少ないUボートで戦っています。しかし、先に竣工した空母が代わりに通商破壊に活躍しています。また、デーニッツ長官はUボートが冷遇されている分、エレクトリックボートの開発を急がせています。

感想、気付かれた事募集しています。

## Uボート

第一次大戦時、独海軍のUボートは一時英国を飢餓寸前にまで追い込んだ立役者であった。それゆえ、戦後連合軍はベルサイユ条約でその保有を禁じた。

しかし、独逸側は設計等を秘密裏に外国で行うなどして研究を継続し、また乗員も対潜学校で育てるなどした。そしてヒトラーの再軍備と共に再び公に配備を開始した。Uボート艦隊再建を協力に押したのが、自身もかつてUボートの艦長であったデーニッツ提督であった。しかし、彼の考えた計画は、現実には上手くいかなかった。開戦時、実戦配備されていたUボートは大小併せて57隻であった。しかも、沿岸用も併せてであった。デーニッツ提督はヒトラーに800隻以上の量産を進言したが、しかし戦艦や空母の整備に資材と人員を取られ、結局250隻に計画を縮小されてしまった。それに加えて、商船改造空母の予想外の活躍とナチ党政権の失脚によるデーニッツ元帥の権威低下により、Uボートの陰はさらに薄くなってしまうた。

デーニッツ提督はUボートの失地を回復するべく、ワルター機関搭載の新型艦の開発を急がせた。これが後に連合軍を脅かす高速艦エレクトリックボートである。また、彼は既存艦の能力を高めるべく、新兵器の開発を急がせた。

1941年に日本からもたらされた酸素魚雷は独逸潜水艦隊でも本格採用された。取り扱いが難しく、乗員達はその搭載を嫌ったが、遠距離攻撃や軍艦、とくに船団を護衛する高速艦への攻撃で多大な功績を残した。接近する駆逐艦を酸素魚雷で撃沈し、敵から脱出し

た例も多々あった。

連合軍が本格的に護衛戦力を揃えるようになった1942年以降、Uボート最大の秘密兵器となったのが、連合軍からマウスキッドと恐れられた直上攻撃兵器であった。この兵器は、甲板上に設置されたランチャーから無数の小型ロケットを垂直に発射するものであった。一発あたりの威力は小さかったが、小型艦艇にとっては恐怖の的となった。

もう一つ上げるとすれば、音響魚雷があるが、こちらはすぐに連合軍が対策を打ってしまい、改良中に休戦となり、その進化を発揮できなかった。

後に、通信装置の改良により、水中と水上との連携が可能となると、Uボートと航空機またはUボートと水上艦艇が連携して船団を攻撃するようになる。Uボートは終戦まで大いに活躍する事となる。

## Uボート（後書き）

マウスキッドは昭和38年に少年サンデーで連載されたサブマリ  
ン707に登場した秘密結社の潜水艦の武器です。



## 独逸の同盟国事情

独逸の同盟国は軒並み、弱小国であった。特に、イタリアの弱さは世界中の軍隊が信じて疑わないものであった。ではその他の国はどうであったか。

北欧の小国であるフィンランドは戦前よりソ連との国境問題があり、冬戦争と呼ばれる戦争が起きていた。この戦争は結局フィンランドの敗北で終わったが、損害はソ連軍の方が遥かに大きく、その精強振りを見せつけた。このフィンランド軍はその後再び侵攻してきたソ連軍との間に起きた継続戦争においては、輸入した米国製F2Aバッファロー戦闘機を中心に、フランス製のモラン戦闘機、イタリア製のフィアット戦闘機、独逸のメッサーシュミット戦闘機で編成された空軍や古くはスキー部隊、後にはドイツ製突撃砲で編成した部隊を持つ陸軍が大活躍し、最終的にソ連に奪われた領土を全て奪回している。

ルーマニアもフィンランド同様ソ連と国境を接しているが、独自で航空機生産能力を持っている国で、空軍が保有する主力戦闘機は同国製のIAR80戦闘機で、性能こそ平凡であったが、製油所に爆撃を加える米英軍機、およびソ連軍機と戦闘を行い、輸入したメッサーシュミットやモラン戦闘機と共に多くの功績を残した。また、陸軍はフィンランドと同じくドイツ製の戦闘車両を輸入して戦った。

一方、独逸が占領したフランスでは、真っ先に独逸が海軍艦艇の接收を行っている。この時、フランス軍の艦艇で独逸地中海艦隊が編成され、マルタ島攻略などを行っている。これらの艦艇は1943年に一部フランス海軍に返還されたが、そのほとんどがすぐにフランス義勇艦隊所属になり、ドイツ側に参戦している。ちなみに、

この時ストラスブル級は返還されたが、代わりにリシュリー級戦艦が独逸に接収された。ただ、そのころにはヒトラー総統が逝去し、独逸は再び中道派の政府になっていたため、フランス側のサボタージユなども減っていた。また海軍以外にも、空軍や陸軍が義勇部隊を東部戦線に送っている。

かつて内戦の際独逸が援軍を送ったスペインは、正規の派遣軍こそ出さなかったが、やはり義勇空軍と陸軍を独逸からの要請で東部戦線に送っている。ちなみに、その見返りとしてスペインは独逸が地中海で捕獲した英重巡ロンドン等を譲渡され、内戦の際失った海軍力を回復させた。

## 独逸の同盟国事情（後書き）

何かご意見ありましたら何なりと言って下さい。

## ソ連再侵攻

1943年2月、ソ連軍は再び欧州への侵攻を再開した。米英から多数の兵器、軍需品の供与を受け満を持しての再進撃であった。

最新鋭のT34-76戦車、Yak3戦闘機やシュトルモビク襲撃機を配備し、かつ連合国からレンドリースされたバレンタイン戦車やP39戦闘機も使用していた。しかし、進撃はすぐに止まってしまう。兼ねてからソ連軍の進撃を予想していた独逸軍が準備万端にして待ち構えていたからだ。独逸軍は最新鋭のタイガー戦車やFw190戦闘機、そしてHe185爆撃機を投入していたのであった。

He185爆撃機は、日本からもたらされた艦上爆撃機彗星を元に開発された機体で、初期量産型のA型は彗星そのものであったが、B型は地上攻撃用に大幅に改修され、機体が一回り大きくなり、爆装が1tまで可能となり、装備された機銃も12.7mm機銃とされた。さらに、用途によつては翼下に37mm機関砲を装備可能とされていた。シュトルモビクに比べると小さいが、運動性能は良く、爆弾を切り離して37mm機関砲を装備していなければ、戦闘機とも空戦可能とまで言われた傑作機であった。

ポーランド国境やルーマニア方面から一気に進撃を開始したソ連軍は、物量を持ってがむしやに進んだ。しかし、ドイツやルーマニアは激しく抵抗した。ソ連の悪評は欧州全体に響いていたからだ。また、このころ独逸はナチス政権から中道派政権に移っており、独

逸兵には防衛意識が高まっていたし、ルーマニア等でも好感が高まっていた。この政権が誕生できたのも、反ナチ派の高官が陸海軍に多かったからであるが、それは別の話である。

結局、ソ連の侵攻はしばらくしてから停滞せざる得なかった。

一方、海での戦いと言うと、ソ連艦隊出港の報を偵察中のUボートから受けた独逸本国艦隊は全力を持ってこれを迎撃した。まだ竣工して間もないFDGを旗艦に、戦艦3、巡洋戦艦2、重巡6隻であった。ちなみに、この時独逸海軍は艦隊用空母2、商船改造空母4隻を保有していたが、いずれも北海での通商破壊任務やドッグ入りしていたため、この海戦には参加しなかった。

両艦隊はダンチヒ沖で会敵、そして距離2万mになったところで、まずソ連艦隊が発砲した。後にダンチヒ沖海戦と呼ばれる、独ソ唯一の大型艦同士の海戦の始まりであった。

## ソ連再侵攻（後書き）

F D Gとはフリードリヒ・デア・グロッセのことです。

## ソ連海軍事情

ソ連海軍は日露戦争での敗北に加えて、革命によって潰れたも同然だった。なにせ、当時の皇室ロシア海軍の士官は皆貴族出身であった。つまり、革命での排斥対象であった。つまり、人事面で大きな痛手を負ってしまったのだ。また、艦艇も多くを失い、残った艦も半ば放置されてしまった。

その後、1930年代に入り、艦艇の新造や改装などを行い組織の復旧に努めたが、ここで再びスターリンの大粛清が起こってしまった。多くの人材を失ってしまった。特に、8人の提督全てを失ったのは痛かった。その後も、戦力の回復を図ったが、陸軍や空軍の戦力整備に力が注がれてしまい、海軍の復興は思うように行かなかった。

そんな状況が一変したのは、独逸の海軍力の増強であった。特に独逸が新型の戦艦や空母を配備したのは脅威であった。バレンツ海はいざ知らず、レニングラードのあるバルト海側からの侵攻やバルト海の封鎖が現実の物となったのだ。

そこで、ようやくスターリンも海軍の増強を決めた。新造艦の建造だけでは間に合わないため、急遽同盟関係にあったアメリカから艦艇を買い取った。この時、スターリンは空母の購入も望んだが、アメリカ海軍でも不足していたため、この話は流れてしまった。また、新造艦の建造も技術力不足がたたって、当初より大幅な計画縮小を余儀なくされた。

それでも、1943年初頭において、ドイツとの正面对決をするであろうバルチック艦隊は戦艦4、重巡4、軽巡3、駆逐艦15とまがりなりにも数を揃えた。また、約1年近い間訓練を行ったため、

練度もそれなりに高くなっていた。

ダンチヒ海戦時のバルチック艦隊司令長官のルイチェンコ中将は、一年前まで重巡カリーニンの艦長であったが、2階級特進の上司令に抜擢されていた。後に、ロシアのニミッツと呼ばれる男で、その采配は冷静沈着で粘り強かった。また理論家でもあり、その後の軍法会議で見事無罪を勝ち取ることとなる。

そのルイチェンコ中将指揮のバルチック艦隊は、独逸艦隊に対し、砲門数での有利を生かして戦いに望んだ。



## ソ連海軍事情（後書き）

実際のソ連海軍がどこまで訓練をできたかは微妙です。ソ連ではスターリンによる独裁や政治将校の存在という大きな問題があったからです。

感想などお待ちしています。

## ダンチヒ沖海戦（前書き）

艦隊の編成については後日アップします。

## ダンチヒ沖海戦

ダンチヒ沖海戦は、ソ連海軍の初弾発砲から始まった。距離は2万5千m。しかし、やはり長距離砲戦をするには乗員の練度不足であったのか、独逸艦隊が初弾を発砲するまでに、有効弾を与える事は出来なかった。

独逸艦隊の発砲開始は距離2万mであった。FDGの砲弾は口径40,6cmであったので、その水柱は、それまで36cm砲弾の水柱しか見たことなかったソ連海軍水兵たちを恐れさせた。しかし、FDGの砲弾は近弾にはなっても命中弾は中々得られなかった。やはり竣工から2ヶ月しかたっていないため、乗員の練度が不足していたのだ。結局彼女がこの海戦で得た有効弾は2発のみで、戦果は戦艦ノヴォーロシスクを中破させただけであった。

一方のソ連海軍は遠距離砲戦こそダメだったが、近距離砲戦ではかなりの有効弾を得た。ただ、独逸側もFDGを除けば歴戦艦であったため、ほぼ殴り合いの結果となった。まず最初にソ連側の戦艦マラートがビスマルクの38cm砲弾をくらい大破後自沈した。かと思えば、独逸の装甲艦（ポケット戦艦）リュッツオウがウラジオストツクの36cm砲弾の直撃により魚雷が誘爆し轟沈した。

小艦艇同士の戦いは、酸素魚雷と電子兵器を載せた独逸側の有利に終わり、ソ連側は重巡1、軽巡1、駆逐艦5隻を失った。対する独逸艦隊は軽巡と駆逐艦をそれぞれ1隻ずつ失っただけであった。

最終的に、海戦の結果はほぼ痛みわけに終わり、独ソ両艦隊はお互い主力艦を沈めぬまま弾薬を使いきり、海戦は終わった。最終的に独逸艦隊は喪失は前述の3隻のみであった。対するソ連は前述の8隻で、沈めた数では独逸の勝利で終わった。

戦術的には独逸の勝利であつたが、戦略的には痛みわけであつた。この海戦で主力艦のほとんどが損傷し、ドック入りが必要になつたため、得意の水上艦による通商破壊がしばらく行えなくなり、おまけにソ連に対しての海軍優位が一時的とはいえ崩れてしまった。それは、独逸にとつては無視できぬ事であつた。

これが評価され、ルイチェンコ中将は後に敗戦の責任追及の裁判で無罪を勝ち取っている。

## ダンチヒ沖海戦（後書き）

ソ連艦隊司令、ルイチエンコ少将の名は、実業之日本社発行の群青の航跡から貰っています。

## イタリア脱退

1943年6月

この月、世界に激震が走った。枢軸国の主要国であったイタリアが、三国同盟から脱退、局外中立を宣言したのだ。

既にエチオピア侵略から長年戦争を続けていたため、イタリアにはもはや戦う力は残されていなかったのだ。というよりも、犠牲に比べ戦果の少ない戦争に、国民のムツソリーニへの不信感が爆発した結果であった。

この瞬間、ファシスト政権は崩壊し、バドリオ新内閣が発足した。ただ、この政権は中々強かであった。

彼らが恐れたのは独逸が裏切りとして報復攻撃を仕掛けてくることであった。それがないう、まず彼らが行ったのは、イタリアに譲渡されたイギリスからの捕獲戦艦を2隻とも独逸に返上する事であった。もちろん、局外中立であるから、直接枢軸国に兵器は渡せない。ただし、ここは巧妙であった。実は、新イタリア政府は、クーデター発表から局外中立発行までに一ヶ月の時間を設けたのだ。この間は、独逸への武器の輸出が国際法的にも認められる。この一ヶ月の間に、2隻の戦艦や航空機600機等が独逸に引き渡されている。

とにかく、こうして独逸の機嫌をとったのであった。

また、もう一つのコalition国であった日本に対しては、少数の航空機を引き渡したいがいには特に何もしていない。ただ、日本の同盟国で

あり、かねてから軍艦の発注があつたタイ王国へは以前に引き渡したタクシン級軽巡2隻に続いて、さらに2隻の重巡と軽巡に4隻の駆逐艦、6隻の潜水艦。その他の艦艇3隻を引き渡している。

その他の枢軸国。インドネシアやインド、満州国へも艦艇や航空機を引き渡している。

イタリアの枢軸脱退は、どちらかというと独逸では、弱いイタリアが抜けたという考えが強かったので、特に何も起きなかった。距離が遠い日本でも同じであつた。むしろ連合国を怒らせた。米軍はイタリアからの上陸を考えていたのである。それが潰えてしまったのだ。

こうして、地中海方面からの連合国の反抗は事実上不可能となつたのであつた。

## 大西洋戦争

独逸海軍の大規模な建艦計画変更は、英国海軍に大きな衝撃を与えた。特に、独逸が通商破壊戦に空母を投入し、反比例するようにUボートの活動が予想より低調だったのはありえないことであった。このため、護衛艦の建造計画が大きく削減される事となった。また、建造される護衛艦も対潜兵装を減らし、対空兵装を大幅に強化することとなった。

独逸が通称破壊戦に空母を投入した始めたのは、まやかし戦争が終わり、独逸がフランスへ侵攻した直後からであった。この時期、船団の護衛艦の対空兵装は不十分で、また護衛空母もなかったため、独逸海軍空母部隊は実に半年近く、大西洋や北海を縦横無尽に暴れまわった。それによって、実に80万t近い連合艦船が犠牲となった。

その後、英海軍が正規空母を投入し船団護衛に投入したため、独逸空母の活動は一時低迷した。しかし、地中海方面での独逸海軍の活動が活発化し、英海軍の戦力が大西洋から引き抜かれ、さらに独逸が艦載機に新型のFw190戦闘機やHe185爆撃機を投入すると、再び独逸海軍の空母の活動が活発化した。日本海軍の機体を模範とし、航続距離が長い独逸機は船団にとって疫病神であった。英海軍が独逸機動部隊に対して不利だったのは艦載機的能力が大幅に劣っていたことにあった。また、空母の建造が追いついていないことも原因であった。また、支援を期待した米大西洋艦隊が、太平洋に戦力を取られ活動を制限されたのも大きな打撃であった。

英海軍は1942年、相次ぐ戦艦や空母の消耗に対して、戦艦ヴ



アンガードの竣工を急がせ、さらにコロツサス級軽空母や護衛空母の整備も急いだ。だが、結局終戦までにこれらの計画で実を結んだ物はごく僅かであった。

## 追記

### ダンチヒ沖海戦ソ連艦隊編成表

戦艦ノヴォーロシスク級3隻、マラート級2隻、重巡4、軽巡3、  
駆逐艦14  
司令官ルイチェンコ海軍中将  
旗艦戦艦ノヴォーロシスク

### 同独逸艦隊編成表

戦艦フリードリヒ・デア・グロッツセ級1隻、ビスマルク級2隻、シ  
ヤルンホルスト級2隻  
大巡2隻、重巡3隻、軽巡4隻、駆逐艦12隻  
司令官クラウス海軍大将  
旗艦フリードリヒ・デア・グロッツセ

## 大西洋戦争（後書き）

この世界においては、独逸は1943年時点で艦隊用空母2、商船改造小型空母5隻（内一隻は練習空母）を保有しています。

## 北海大海戦 上

1944年6月に入ると、英国では国民の間に厭戦感情が高まりつつ、エジプト、インドを失い、さらに独空軍の四発爆撃機、He 277の本土爆撃にさらされていたからだ。おまけに、海の守りもかつて七つの海を支配したロイヤルネービーの東洋艦隊、地中海艦隊は既に無く、残る本国艦隊も僅かに戦艦5、空母4隻しか主力艦は残されていなかった。Uボート対策に作られた護衛空母や護衛艦も、最新鋭のエレクトリックボートと音響探知魚雷を装備した独逸潜水艦隊により撃沈される船が相次いでいた。

英国にとって、頼みの綱は同盟国であるアメリカとソ連であった。しかし、アメリカは陸軍航空隊を英本土に派遣するのが精一杯で、とても陸上兵力や艦艇を大西洋方面には回せなかった。またソ連も、英米から物資輸送が通商破壊戦によって滞っているため、ヨーロッパ方面への侵攻は下火になっていた。

一方、対戦相手の独逸でも、ナチス党が倒れ、アウデナー政権に移行した今、英米と戦う必用はなくなっていた。それよりも、未だ欧州への野望を捨てぬソ連との戦いに集中したいのが本音であった。英独の和平交渉が水面下で始まっていた。しかし、当たり前だが、自国有利の条件にしたいのが人というもの。独逸としては、エジプトやイランを始めとする各占領地の独立国家を承認し、さらに拡張した軍備を認めるようせまった。対しイギリスは占領地の返還とUボートの大幅削減に空母の廃棄を迫った。結局、両者とも妥協点を見出せなかった。

そして、両国は交渉を有利に進めるため、最終手段に出た。それはもてる海軍力を総動員し、相手国の残存海軍兵力を駆逐、殲滅するというものであった。

その結果起こったのが、後に陸軍国家独逸最後の戦いといわれた  
北海大海戦であった。

独逸海軍は本国艦隊にあつた、戦艦4、巡洋戦艦2、大小含めた  
空母6隻で編成した、新外洋艦隊を出撃させ、イギリスは残存する  
本国艦隊の全てでこれに挑んだ。

## 北海大海戦 上（後書き）

予定では後2、3話で終わります。今しばらくお付き合い願います。

## 北海大海戦 航空戦上

北海海戦は、両軍とも艦載の偵察機での索敵から始まった。しかし、英海軍はここから大きくつまづく事になる。

この時、独海軍は空母搭載のHe 185とともに、水上機による偵察も行った。この時使ったのは、日本の零式水偵をモデルにアラド社が設計・開発したAr 200水上機であった。この機体は零式譲りの長い航続距離と、独逸機特有の堅実な設計が融合した優れた機体であった。

対し、英軍が使ったのはTBFアベンジャーであった。この機体は米国製の雷撃機で、機体自体は英国製の雷撃機より勝っていた。しかし、この機体を出したため、英軍は大きく苦戦する。

最初に敵を発見したのは英軍であった。直ぐに、英空母から攻撃隊が発艦した。しかし、問題が発生した。

この時、英空母はかなりごちゃ混ぜな機体を使っていた。英国製のシーファイアー、ソードフィッシュ、米国製のコルセア、ドーントレス、アベンジャーと性能にばらつきのある機体であった。この内、シーファイアーは航続距離が極端に短いため、艦隊護衛用に使えない。攻撃隊はその他の機種で編成され出撃した。しかし、ただでさえ、少ない艦載機にシーファイアーを混ぜたため、その他の機体の合計は総計して150機であった。この内、30機近いアベンジャーが偵察で引き抜かれているため、さらに少ない数となった。

英攻撃隊は最初アメリカ製の機体が中心となって独艦隊を攻撃した。しかし、レーダーでかなり手前で探知され、最新のFW 190

Dの邀撃を受け、ここで4分の3が脱落し、残った機体も対空砲火で大きな損害を負った。対し、独逸側の被害は駆逐艦1大破のみであった。ただし、おっとり刀でやってきたソードフィッシュによってさらに駆逐艦1が失われたのは、英攻撃隊の奮闘を示している。

## 北海大海戦 航空戦上（後書き）

次回は独逸サイドです。



## 北海大海戦 航空戦下

一方、独逸機動部隊も航空機を発進させ、英艦隊への攻撃をかけていた。既に、水偵で英艦隊の位置を掴んでいた独逸攻撃隊は、約120機の集中攻撃で英艦隊に挑んだ。

戦闘はまず、英艦隊のシーファイアと、攻撃隊護衛のFw190Dとの空中戦から始まった。シーファイアは約60機、しかしFw190Dは約50機。やや英軍有利であった。しかし、それは悪魔で数だけの事。最終的に、開戦以来の優秀なパイロットを集めて挑んだ独逸側にその差は埋められ、戦闘機同士の戦いは互角であった。そして、最終的に戦闘機隊は突破口を開けることに成功した。

英艦隊に独攻撃隊が襲い掛かった。

英艦隊は対空砲火を張ったが、この時はまだVT信管は出来ておらず、さらに独攻撃機はいずれも速度が英軍機より速かったため、英軍の兵士達を惑わし、有効な対空砲火を妨害した。

防空陣形を突破した独軍機は戦艦には目もくれず、4隻の空母に襲い掛かった。

独逸海軍のHe185爆撃機は、空軍との共用機で、1t徹甲爆弾を装備可能であった。その1t爆弾を次々と英空母に叩きつけた。重装甲で知られる英空母の装甲といえど、さすがにそのような大型爆弾に耐えられるはずがなく、次々と火災を起こし、航行不能に陥った。

さらに、今度はFi194雷撃機が襲い掛かった。この機体は、日本の天山雷撃機のライセンス版で、独逸版はエンジン変更により、速度が上がり、装甲と武装が強化されていた。

雷撃隊は、駆逐艦と巡洋艦をターゲットにした。英艦は必死に回避運動を行ったが、全てを回避する事は出来なかった。結果、駆逐

艦2隻が轟沈、1隻が大破後自沈。巡洋艦2隻が大破し、内1隻は後沈没した。

結局、海戦第一幕といえる航空機同士の戦いは、空母3隻、巡洋艦1隻、駆逐艦3隻を撃沈した独逸側に軍配が上がった。

航空機の傘を失った英艦隊は一時ここで撤退も考えたが、間もなく日暮れを迎えようとしていたため、レーダーを使用しての夜間砲戦に持ち込むことにした。

## 北海大海戦 砲撃戦 上

航空戦が終わり、損傷艦艇を離脱させると、独英両艦隊は夜間砲戦を行うべく、お互いを求めて前進した。

お互いの距離が100kmに達した時、両艦隊のピケット艦のリーダーが敵を探知した。英艦隊では直ちに砲戦準備がなされ、総員が戦闘配置に着いた。

一方、独逸艦隊でもそれは同じであったが、一つだけ違う事があった。戦艦と巡洋艦がそれぞれ水上機を射出させたのだ。

英艦隊はこれを弾着観測機の発進と確信して、自身の勝利を疑いのない物とした。

距離は30kmまでつまった。しかし、その直後リーダーが真っ白と成った。実は、水上機はアルミチャフをまき、リーダーを妨害したのだ。これによって、リーダー射撃は不可能になった。

さらにそこへ、水偵から照明弾が投弾される。

独逸艦隊は、リーダー射撃ではなく、背景照射のもとでの砲撃戦で挑んだ。これは、独逸艦隊司令のクラウス大將が日本からもたらされた第一次ソロモン海戦の教訓をもとにした戦術を行ったからだ。

距離2万m、まず独逸艦隊が発砲した。FDG級2隻による射撃は、恐ろしく正確であった。

一方、英艦隊も混乱から立ち直り、独逸艦隊から遅れること20秒、射撃を開始した。しかし、そこで独逸艦隊が意外な行動に出た。一斉に右回答したのだ。当初、英艦隊司令部はこの行動の意味がわからなかった。しかし、しばらくして気づいた。これはかの東郷提督が行った敵前大回頭だと。

直ぐに、英艦隊は反対方向への回頭を図った。しかし、不幸だったのは、この瞬間にFDGが被弾してしまったのである。幸い幕僚は無事だったが、無線アンテナを叩き折られ、通信機能が一時麻痺

してしまった。

この間に、独逸艦隊は回答を終え、英艦隊への集中射撃を開始した。たちまち、KGVは5発の命中弾を浴びた。また、2番艦のデューク・オブ・ヨークもビスマルク級2隻の集中射を受け、1、2番砲塔が全壊した。

戦闘は独軍有利で進んだ。戦闘開始20分。KGVは大破戦列離脱。2番艦DOYは航行不能。3番艦アンソンも炎上。誰もが独海軍の一方的勝利を確信した。

しかし、そのとき、独逸戦艦ビスマルクが大爆発した。

## 北海大海戦 砲撃戦 下

ビスマルクに痛打を与えたのは、ロドネーであった。彼女は速力が遅かったため、艦隊の最後尾にいた。それが幸いし、この時点でロドネーは大した打撃を負っていなかった。

ビスマルクはヨーロツパ最強の戦艦とうたわれたが、実際は第一次大戦中のバイエルン級戦艦の設計を流用していた。だから、この時代の大和やアイオワに比べると、決して最新鋭の戦艦とは言えなかった。一応防御装甲は改良されていたが、それでも、一部で設計の古さがあるのは咎めれない。

ロドネーの射撃で、ビスマルクは3基の砲塔が使用不能に陥り、速力もガクンと落ちた。炎上する彼女は格好の的となり、短時間に40cm砲弾7発、36cm砲弾3発を喰らった。さらに、突入してきた英巡洋艦の20cm砲弾5発も喰らった。

英艦隊はここで一気に独逸艦隊に大打撃をくらわせた。

しかし、独逸のお返しは猛烈だった。特に、ビスマルクに打撃を与えたロドネーは集中砲火を受け、40cm砲弾12発、38cm砲弾5発、28cm砲弾7発を喰らった。そして、その内3発程度が装甲を貫通し、弾火薬庫で炸裂した。

大英帝国が開戦以前に建造した最後の戦艦はこうして北海深く沈んだ。

ロドネーの沈没により、ほぼ海戦の趨勢は決まったも同然だった。独逸側は未だ5隻の戦艦が戦闘可能にあったのに対し、イギリス側は2隻にまで減っていた。

結局、英海軍はその高速を利して、撤退を開始した。独逸側は深追いはせず、沈没艦の乗員救助に全力を尽くした。

海戦は英艦隊が撤退した2時間後、大破漂流していたビスマルク

が駆逐艦の魚雷により自沈処分された瞬間に終わった物とされた。

この海戦で、独海軍はビスマルクに加え、巡洋艦2、駆逐艦5隻を撃沈されたが、英海軍の損害はそれをはるかに上回り、戦艦3、空母3、巡洋艦6、駆逐艦8隻を失い、事実上壊滅した。この海戦により、独逸はWW1の雪辱を完全に晴らした。そして、講和会議は独逸有利の形で進められる事となった。

北海大海戦 砲撃戦 下（後書き）

次回、いよいよ最終話です。

## エピローグ 休戦

独逸と連合国の間の休戦講和は仏蘭西のブレストで行われた。交渉は難航したが、独逸は北海海戦での勝利や、Uボートの通商破壊戦による優勢をフルに使って会議をリードした。

結局英国はエジプトの独立を認め、フランスはドイツへの領土割譲を容認した。アメリカはソ連への支援を中止し、これらを全て容認する事となった。ちなみに、連合国は軍縮条約を提案したが、ドイツがソ連との戦争を継続したため、このベルリン軍縮会議は戦後の1947年に行われることとなる。

一方の独逸は各占領国の亡命政府を認めた。これらは帰国後独逸の傀儡政権と選挙で戦う事となる。

独逸はこの戦争の間にかつての栄光を取り戻し、さらに強大化したナチスをヒトラーの死により駆逐しでき、かつ国内の経済を完全に復興した。

こうして、独逸と連合国との戦闘は終わった。しかし、連合国は日本やアジア諸国との、またドイツはソ連との戦争が残っていた。フィンランドやルーマニアでは未だに熾烈な戦いが続いていた。独逸はこれらの国々と協力し、ソ連を撃退せねばならなかった。ちなみに、1945年に入ると、連合各国も反ソ連合を組み、旧枢軸の独逸を始めとする国々を支援している。ちなみに、独ソとの間の戦争は欧州大戦と呼ばれ、最終的にソ連が独逸の戦略爆撃で国内が荒廃し、スターリンが暗殺される1945年9月まで続いた。

大戦こそ終わったが、世界はまだ戦火を残していた。時に、1944年9月のことであった。



## エピソード 休戦（後書き）

ここまで付き合っただきありがとうございました。しかし、大東亜編はまだまだ続きます。どうかよろしく願います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0128b/>

---

幻艦記 欧州編

2011年6月8日13時48分発行